

人と人、人と社会は、 どうつながっていいのか

協同の
発見

コミュニティ・ベーカーリー「風のすみか」の挑戦

山本賢司（NPO法人 文化学習協同ネットワーク / 「風のすみか」をつくる会・事務局）

2年がかりのプロローグ

2004年9月25日、「コミュニティ・ベーカーリー 風のすみか」がオープンしました。このお店は、「地域の人に必要とされるパン屋さんでありたい」「異世代が一緒になってイキイキと働ける場でありたい」「とりわけ、働くことに希望の持てなくなっている若者が『ここで働きたい』『こういう働き方も面白い』と思える魅力的な仕事・職場をつくっていききたい」という願いを込めて立ち上がったパン屋さんです。

立ち上げまでの道のりは、やはり(?)平坦ではありませんでした。2002年12月から



初期のワークショップの様子



「つくる会」でのビル改装の話し合い

立ち上げのための予備調査をスタートさせ、2003年度には日本財団からの助成金を得て、ワークショップや「ワンディチャレンジショップ(1日パン屋さん)」として地域のイベントに出店するなどするのと並行して、「風のすみかをつくる会」(以下、「つくる会」)を結成して商品開発や資金集めなどに奔走しました(これらの活動の一部は、『協同の発見』2003年5月号の誌面をお借りして紹介させていただきました)。

資金に恵まれているわけではないどころか「資金ゼロ」からスタートした私たちの財産は、「つながり」でした。主な製パン機材は、廃業されるというパン屋さんを知人に紹介されて、タダ同然の金額で手に入れる



自分たちでつくるパン屋

壁塗り(左、中) 床塗り(右)



ことができました。テナントを借りて維持するのは難しいということから、「つくる会」を側面援助してくれていた「特定非営利活動法人(NPO法人)文化学習協同ネットワーク」(以下、「協同ネット」)の活動拠点であるビルの1階を改装して格安で使わせていただくことになりました。立ち上げ・改装資金は、「風のすみか債」という名前で協力を呼びかけ、およそ100人の方から1000万円もの支援をいただきました。このようにして、2004年5月には工房を立ち上げる目途がついてきました。

職人候補として関わってくださっていた方から辞退の申し出があったのは、その矢先です。急遽、「協同ネット」のスタッフで、このプロジェクトの中心的役割を担ってきた浅野由佳がパン職人として修行することになりました。以前、浅野は短期間ながら天然酵母のパン屋さんにインターンしたこともありましたが、それは必ずしも「パン職人」となることを目指したものではありません。「そのつもり」で、かつ短期間で一定のレベルに達しなければなりません。このピンチを救ってくれたのが、「AKO天然酵母」さん。工房完成と同時にパン職人の方を2ヶ月間も派遣してくださいました。つきっきりの指導と浅野の努力とセンス、このプ

ロジェクトを立ち上げから支えてくださっている「つくる会」の方達がいたからこそ、

オープン後、「この近所では一番おいしい」と言っていただけのレベルのパンでオープンを迎えることができました。

また、「パンモニター」の方達の協力もありました。工房が完成し、修行で試作したパンをどうするか考えた結果、試作品を食べながら一緒にパンを育ててもらおう……と、「パンモニター」を募集したのです。工房が完成した6月からオープンの9月まで、およそ80の方が「パンモニター」として、パンを食べては感想を送ってくださいました。この「パンモニター」の方達の多くは、オープン後も「定期セット」の購入を続けてくれています。

これらの大きな枠組みは、もっぱら「大人」の取り組みの成果ですが、「協同ネット」の運営するフリースペースや、その周辺に関わる青年達は、彼(女)らならではの参加を続けてきました。屋号「風のすみか」は、彼(女)らがつけたものです。助成金事業として取り組んだ「ワンディショップ(1日パン屋さん)」のときには、大きな看板をつくり、取り組みを紹介する通信をつくり、元気な声で呼び込みと接客をしました。ほとんど全てのワンディショップで完売し、そのたびに、みんな喜び合いました。現役メン



ワンデイショップ

バーも卒業メンバーも、多くの子ども・青年が「どうせお金ないんでしょ!」と、嬉しそうに壁を塗り、床を塗ってくれました。「協同ネット」の母体となった「文化学習センター」(学校に行っている子ども達の「権利としての学力保障」と「放課後の居場所づくり」に取り組んでいる「塾」)を卒業したばかりの子が工房のパンづくりに参加して重要な役割を果たしてくれるようになりました。オープンが近づいた頃、フリースペースに通っていたけれど足の遠のいていた工作の得意な子が、「浅野もがんばってるんだから、負けられねーよ」と、素敵な看板を作ってくれました。

この2年のプロローグは、最初から資金に恵まれていれば通らなくて済んだ道のりでした。時間をかけて話し合い決まったことも簡単に覆ってしまう状況を何度もくり抜けながら、関わった誰一人として欠けることのないように歩いていくというのは、なんとも面倒で疲れることでした。そのハードさを経て、とにもかくにもオープンという一区切りをつけて思うことは、この2年は財産なのだということです。

オープンを迎えられたのは、唯一の財産である「つながり」の輪を強く大きくしてきた成果そのものです。だから、「風のすみか」には、いつも多くの人が集ってきます。人が集う活気のある店は潰れません。もしもス

タート時点で資金もノウハウもあったとしたら、腕利きの職人を雇い、良い場所にテナントを借り、ちょっと宣伝するだけで立ち上げることができたでしょう。その方が、疲れるかもしれませんが面倒ではありません。しかしきっと、「これは私の店」と思ってくださる方とは出会えなかったでしょう。どちらが良かったのか……と、ちょっと悩む自分もいますが、「面倒だったけど、まあ済んだことだし」と思っているのも事実ですので、きっと結果オーライなのでしょう。資金もノウハウも無かった自分達が、「無謀」と言われながらもスタートラインに立っていること、そして、そのために費やした2年を誇りたいと思います。

現在はオープンから1ヶ月が経ち、「午後3時前に売り切れ」という異常な(?)勢いは落ち着きつつありますが、ほぼ毎日のように完売が続いています。当初は「半年後に」と考えていた日商目標を達成できているペースですが、新聞報道もあったので、まだ通常の状態ではないと考えています。1ヶ月を経たからこそ見えてきた課題も山積みです。その一つが、「協同労働」を、どう具体化していけるかです。



研修の様子

「協同労働」を、どう具体化していけるか

立ち上げに大きく関わった「協同ネット」(ホームページは <http://www.npobunka.net>) は、任意団体であった約10年前から、不登校の子ども達の居場所づくりを進めてきた団体です。10年前に小・中学校で不登校/登校拒否となり、「学校社会」から外れた彼(女)らは、もう就労年齢を迎えています。最近、マスコミでも「NEET」と言われる、働くことに希望が持てなかつたり、社会参加できないでいる青年層のことが取り上げられています。私たちの目の前にいる青年の多くも、厳しさだけが増していく世の中の厚く高い壁に阻まれ、広い意味での「NEET」のような状態に置かれかねません。



モニターさんを招いての試食会

このプロジェクトは、より直接的には、そんな彼(女)らが、「居場所と職場の中間地点」のような場で、居場所の次の段階(モラトリアム的な社会参加)を過ごしながら社会的自立に向かっていく場をつくる必要から構想されてきました。そのとき私達は、彼(女)らを「なんとか適応できるようにして



「風のすみか」入り口

あげる」のではなく、彼(女)らが声なき声で鋭く問い直そうとしている「オトナ社会の在り方」を、その「つくりかえ」も含めて大事にしたいと考えました。「いまのオトナ社会」に希望の持てない彼(女)らに、「オルタナティブな(もう一つの)働き方」は存在するし、「手をつなぐ」ことで創り出せることに気づいてほしい、そして、彼(女)らが願うならば、オルタナティブな(もう一つの)世界と一緒に生きていこう……というスタンスです。そうすることでこそ、希望が持たずに苦しんでいる彼(女)らは、働くことだけでなく、大げさに言えば、生きていく希望を持ち直すことができると思うのです。

それは具体的には、世の中をどうにかする……という「大きな物語」として進行するのでも、「私の認識を変える」という「小さな物語」として進むことではありません。「風のすみか」での一人ひとりの働き方と、それを支える仕組みをどうしていくか……という「中くらいの物語」なのです。その場の在り方について、オープン前からの議論では、人と共に生きられる自分や、ステップアップしている自分への手応えを感じられること、共に働く仲間として、個人的な好き嫌いや人格の強弱を越えて、働くこと



店での接客

の喜びや厳しさを共有できる関係をつくっていくこと、「協同の働き方」を学び実践する中で、社会の中での自己実現を果たしていけるようになることが確認されてきました。

そのために重要なことは、関わる一人ひとりが「風のすみか」の全体像を、一定、見通していることだと考えられます。多くのアルバイトがそうであるように、分断された労働では限られた手応えしか得ることができません。「自分のした仕事が全体の中でどう役立つのか」「これが出来るようになったら、次はどのステージなのか」。例えばそういうふうに「成長していける自分」「成長できそうな見通し」を具体的に得られることは、即戦力志向の強まる風潮の中では、ますます重要なはずです。

また、全体を見通せるということは、他の誰かのしてくれた働きを理解することでもあります。工房でパンを作っているスタッフはレジが打てません。店舗のスタッフはパンを作れません。双方が役割分担することで、「風のすみか」の「核」が成立します。まだ工房にも店舗にも入れなくても、紙袋

にスタンプを押してくれないと格好がつかえません。ショッピングカードやパンメニューが無くなると困ります。週に何回かの大掃除があるから清潔感のある店を維持できます。配達してくれなければお客様が困っています。「風のすみか」は、「核」の他に多くの「周辺労働」に支えられています。しかし、「核」も「周辺」も、「風のすみか」を成立させるために必要な働きということでは対等です。「職員」として生活をかけて働いていても、「アルバイト」として一定の責任を負いながら働いていても、「社会参加・労働体験」としてフォローされながら働いていても関係ありません。誰が欠けても全体は存在し得ないことを共有しながら、互いの仕事と役割を認め合えることを大切にしたいのです。

月に1回の「全員ミーティング」こそが、これから先の「風のすみか」の在り方を決める場になっていくでしょう。ミーティングは、「風のすみか」の物語と、それぞれの物語を共有し、結び直すための場です。そこは、仕事に対する相互評価と自己確認の場です。話し合うことを通じて、お客様に対する責任を果たすことはできたのかが問われます。働きづらさは無いが、経営はどうなっ



メロンパンは大人気

ているのか、どうすれば改善できるのかを全員で共有しながら明らかにしていきます。「より良いカタチ」を、好き嫌いも立場の違いもなく対等に模索する「面倒で疲れる話し合い」は、だから、これからも続きます。続けることでしか、「風のすみか」のアイデンティティは保てないからです。

まとめにかえて

実は僕は、「協同労働」というものの在り方をリアルに掴めているわけではありません。まだアイマイなまま使っている言葉です。ここまで書いたことが、「協同労働」という小見出しを使って書くのにふさわしいことだったのかも不安があります。

ただ、少なくとも「風のすみか」には、形式を越える意味での「雇う - 雇われる」の関係はありません。そうではないとするなら、どうなるのか。「協同」が「力を合わせてつながっていく関係」を意味するのだとすれば、数々の願いの込められた「風のすみか」を通じて、人と人は、人と社会は、どうつながっていくことができるでしょう。その現実が、きっと僕に「協同労働」のリアリティを教えてくれるものと信じています。